

第3回森を育てる会主催勉強会の報告

アカマツ勉強会

テーマ：アカマツについてもっと知ろう

昔は油山でも広範囲にみられたアカマツ林は里山として利用されなくなり、衰退してきています。森を育てる会はアカマツより常緑樹のほうが目立つほどだった自然観察センターそばのエリアを「アカマツ林として保全する」という目的で1997年12月、シダ刈りから作業をはじめました。それから4年余り、常緑樹の除伐などによりアカマツ林らしい景観をとりもどしてきています。同時に、この林で次世代のアカマツが育つにはどのようにすればよいかなどの疑問、松枯れの被害という新たな事態もおきてきました。ここで改めてアカマツについて学びたいと勉強会を企画しました。

〈報告・世話役/柴戸慶子〉

【日時】2002年1月27日（日）10時～15時

【講師】宮島寛先生（九州大学名誉教授）

【内容】

1. 講義

（1）マツと日本人の歴史

- ・アカマツは、光があたり、乾燥した裸地に最初にはいりこむパイオニア植物である。アカマツの林は人の手がはいらなければ九州では常緑樹で構成される極相林へ移っていく。だからアカマツ林については保全・更新という目先だけを考えるのではなく、それが成立した歴史的・社会的背景を考えるアプローチが必要である。
- ・アカマツは火力が強く、古来薪として、鉄の精錬・焼き物・生活用の燃料などひろく利用されてきた。昭和30年代、薪・パルプ用材などとしての利用がなくなりアカマツ林は衰退してきている。
- ・マツの落ち葉もたきつけや苗の温床として利用されてきた。生の松原では戦後も落ち葉かきの希望者を入札した。しかし、現在は落ち葉の利用者がいず、利用の社会的システムがなくなり、落ち葉掻きは行われなくなっている。
- ・クロマツはその葉がアカマツより防砂機能が高い。海岸の防風・防砂機能として、他に代替がなく、現在も人と強いかわりを持ち、保全が行われている。

（2）更新（次の世代にうつること）のために必要なこと

アカマツ林の更新には、土壌と光の状態がポイントになる。

①光について

マツは、上に何の木もないような場所を必要とする。上に木があると発芽を促す種類の光線は上木の葉が反射し、発芽を阻む作用をする光だけが地表にとどく。上木のないところでマツの発芽率は70～80パーセントだが、木漏れ日のもとでは7～8パーセントにおちる。発芽しても生育がよくない。「道端更新」という言葉があるように法面や、道路沿いといった光が照りつけるような場所によく生育している。

②土壌について

マツは落ち葉などの下の A 層（図参照）という鉱物質の地表を好む。

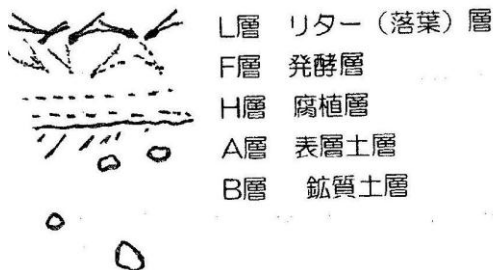
マツの根には共生菌根菌（きょうせいきんこんきん）という菌類が共生する。キノコとして知られるマツタケ、シウロ、キンタケ、ハツタケ等である。これらはマツの根につき樹木の篩部から根に送られる糖をとりこみ、逆に土中の窒素リン・カリウムを樹木に送り込んでいる。

マツの落ち葉を掻かないと雑菌が繁殖し菌根菌は弱ってくる。腐植という栄養のある土壌層が蓄積し、それにより他の植物がふえ常緑広葉樹がはいりこみ、ゆっくりマツといれかわっていく。マツの保全のため落ち葉かきは必要である。

2. 実習（アカマツ林にて）

（1）土壌の観察

【土壌の断面図】



＜アカマツの生育環境としての土壌状態を観察＞

（2）地かきの実習

確認した A 層が露出するように地かき作業を行った。市松模様に、掻いたところ掻かない所をつくった。光環境が同程度で、地かきの有無により、実生の発芽、生育にどのような差がでるか観察することができる。ただし、マツの種子散布は 10 月～11 月なのですでに種はおちてしまっている。発芽がみられるのは 2003 年の 4 月ころになるだろう。

【参考資料】『松と日本人』宮島寛著 はかた夢松原の会 刊

【感想】

アカマツの更新のことばかり気になっていた私でしたが、「なぜアカマツ林が成り立っているのか歴史的・社会的なことを考え保全に取り組む必要がある。そして更新という目的があるならそのために理屈の通った作業をしなければ結果はうまれない。」という宮島先生の言葉に目のさめる思いでした。広い視野と自然を正しく理解する努力の必要性を感じた勉強会でした。

深い学識と経験で指導にあたってくださった宮島先生に 心より御礼申し上げます。